

---

# 八木地区の町家と町並み

-南丹市八木町八木地区伝統的町家調査報告書-

---



2010年3月

京都府立大学大学院 生命環境科学研究科 環境科学専攻  
大場 修

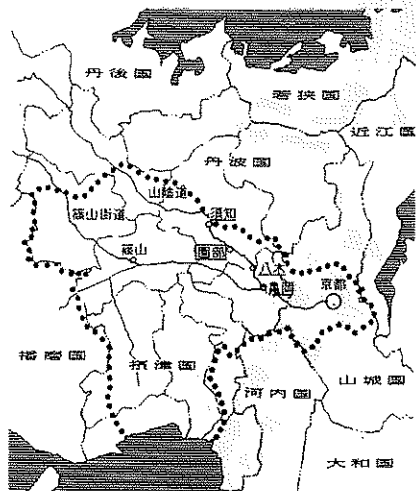


図2：摂丹型民家圏（林野全孝『近畿の民家』による）

## 1.2 八木地区と在地民家形式

八木地区は、いわゆる「摂丹型民家」の分布圏【図2】に分類される地域に属する。摂丹型民家とは妻入を古式とし、その平面は町家のように縦割り型で片方を土間、他方に土間に沿って部屋を並べるといった独特のもので、時代が下がると平入家屋も出現するようになる。摂津・丹波両地域にまたがる広い範囲に分布することからその名が付いている。

この分布域における町は多く、園部城下町、亀岡城下町、篠山城下町を始め、街道町としては八木を始め須知（京丹波町）や福住（兵庫県篠山市）などが、伝統的な町家を残す地区として知られている。これらの町では妻入と平入の町家が混在する独特の町並み景観が形成されている。

しかし、古い町家は相対的に妻入が多く、平入町家は後発型の町家形式であることが、すでに大場による園部城下町における一連の調査で明らかにしている。園部城下においては妻入町家では18世紀前期の遺構が確認されているが、18世紀末頃になると平入が建て始められたことが確認され、19世紀後半すなわち明治以降は、遺構からみて平入町家が妻入町家を数の上

で明らかに卓越するようになる。

同時に、須知では妻入町家が遅くまで建てられ続けることが明らかになっていて、園部城下の町家と同質の構造形式が確認できるとともに、在方に立地する町家形式の後進性、保守性が明らかになっている（以上は、大場『近世近代町家建築史論』「第三章 摂丹型民家圏の妻入町家と平入町家」より）。

八木地区においても、最古の町家遺構は18世紀後期に遡る八木酒造主屋で、摂丹型民家との関係が示唆される妻入町家である。ついで古い遺構は、棟札により天保12年（1841）であることが明らかな福嶋晃家住宅で、大型の平入町家である。福嶋晃家住宅を筆頭に八木地区では、特に本町一丁目から二丁目にかけて平入町家が卓越し、全体的に見ても妻入町家は少数に留まる【図3】。当地区の町家は、幕末から明治以降の遺構が多く、近世に遡るものは、上記した遺構を含めてかなり数は限られるが、いずれにせよ明治以後は平入町家が主流となっている点は八木地区の町家の重要な特徴であり、同様に街道集落である須知地区などの町家とはこの点で大きく異なるのである。

つまり、八木地区は街道集落で農村的な性格も併せ持つものの、園部城下にやや遅れなが



図3: 平入・妻入町家分布図

らも、町家が妻入から平入へと変化をしていったことがわかる。今回の調査では、本町一・二丁目における調査町家の建築年代は全て明治後半以降のものであった。この時期、多くの町家が建て替えられたことになる。しかも、大型の平入町家が多数建てられた。おそらく多くの町家が妻入から平入へと建て替えられたのではないだろうか。

この時期以後の町家群が、今日の八木地区の歴史的景観を構成している。当地区においては明治中～後期に多くの町家が更新され、これにより町並みが刷新された。八木地区にとって明治期は、街道の町並み景観形成のまさに画期とみなすことができる。

【参考文献】

・大場修『近世近代町家建築史論』

中央公論美術出版、2004年12月20日発行

・林野全孝『近畿の民家』

相模書房、昭和55年11月15日発行